

○最新知見報告、基本タイプ3種及び特殊タイプ5種に係わる詳報！

# 旧5円金貨明治3年不明瞭鱗の徹底的研究

島村 一雄

## 1 まえがき

旧5円金貨明治3年の手変りについては、筆者は、文献1)において、明治初期の他の年号も含め、基本的な解説を試みた後、文献2)において、明治3年銘に絞った詳細情報について報告を行い、文献3)において、対象を明瞭鱗(重ね鱗)に絞った報告を実施し、さらに、文献4)において、対象を明瞭鱗(切り鱗)に絞った報告を実施している。文献3)、文献4)の報告を行った理由というのは、文献2)が、網羅的に様々な情報を詰め込んだ結果、情報が錯綜し、不明瞭鱗、明瞭鱗(切り鱗)、明瞭鱗(重ね鱗)の3種それぞれについては、どうなのかという点でわかりにくい内容となっていたため、それぞれ、明瞭鱗(重ね鱗)、明瞭鱗(切り鱗)のみを対象として、画像とともに詳細に紹介したいと考えたためである。この報告により、明瞭鱗(重ね鱗)、明瞭鱗(切り鱗)の手変りの状況が、より明確になったのではないかと考えている。

旧5円金貨明治3年で、詳細な報告が残るのは、現状、不明瞭鱗のみとなっている状況である。不明瞭鱗は、竜の鱗に関して、彫刻の出来栄えの見事さや彫り方の味わい深い美しさの観点では、明瞭鱗に及ばないものの、明瞭鱗にはない変異も多く見られ、手変りの研究対象としても大変面白いものである。

今回の報告では、文献3)、文献4)の延長線上として、対象を旧5円金貨明治3年不明瞭鱗に絞り、画像を豊富に用い、十分なスペースを割りながら、文献2)以後の研究成果も含め、手変り最新情報として取りまとめ、広く公開することを目的とするものである。

## 2 検討方針

旧5円金貨明治3年不明瞭鱗は、年号面に関しては、根本的なところで、模様、図形に係わる特段の大きな変化はなく、比較的安定している。明瞭鱗(重ね鱗)にあって、よくな、三の字の変化であるとか、

明瞭鱗(切り鱗)にあるような、圓の字の第13画、すなわち、「く」がまえ」の一番下の横棒の変化といった系統的な分類に適合する手変りはない。その代り、系統的な分類に乗って来ないような特殊な手変りがいくつが存在する。

一方、旧5円金貨明治3年不明瞭鱗の菊紋面については、有輪、縁どり、無輪の3タイプがある。重ね鱗は、有輪、無輪の2タイプ、切り鱗は、有輪、縁どりの2タイプであるから、その意味では、明瞭鱗にあるタイプを包絡しているとも言える。有輪、縁どり、無輪の3タイプは、日章のみでなく、桐葉、御旗の枠等についても日章に連動して異なるため、呼称として、日章の相違に着目し、有輪、縁どり、無輪としたものである。具体的には、有輪及び縁どりの桐葉は彫りがやや深めで葉脈が直線的な対生、無輪の桐葉は彫りが浅めで葉脈が曲線的な対生、有輪及び縁どりの御旗は枠があるが、無輪の御旗は枠がないなどである。菊紋面についても、日章以外については、これら

有輪、縁どり、無輪の3タイプの中で、模様や図形は比較的安定しているが、日章については、系統的な分類に乗って来ないような特殊な手変りがいくつが存在する。

旧5円金貨明治3年不明瞭鱗の手変りの概要は、上記のようなものであるが、この金種として、基本的なタイプ3種とそれ以外の特殊タイプ5種について、検討及び解説を行っていくものとする。

なお、旧5円金貨明治3年の手変りの構成の概要(存在比等)については、財務省放出品により、多くの情報が得られており、文献2)に詳細を記してあるが、一部を抜粋して付表1及び付図1に示すので、適宜参照いただければと思う。

## 3 個別の解説

### (1) 基本タイプ

基本タイプとしては、図2に示すように、有輪(UC-1)、縁どり(UC-2)、無輪(UC-3)の3種がある。図3より、旧5円金貨



(a) 年号面



(b) 菊紋面：有輪

図1 旧5円金貨明治3年不明瞭鱗の一例（縁どり及び無輪は図2参照）

明治3年全体の中で、不明瞭鱗と明瞭鱗の比率は、不明瞭鱗が50・09%、明瞭鱗が49・91%と、ほぼ半々となっている。明瞭鱗の内訳は、切り鱗が15・13%、重ね鱗が34・79%である。不明瞭鱗中、有輪、縁どり、無輪の存在比は、有輪が84・30%、縁どりが6・48%、無輪が9・22%となっている。これより、不明瞭鱗の大半を有輪が占めており、縁どりや無輪は、非常に少ないことがわかる。特に、縁どりは稀少なものとなっている。

前述のように、不明瞭鱗は、年号面に関しては、根本的なところで、模様、図形に係わる特段の大きな変化はなく、比較的安定しており、菊紋面についても、日章以外については、これら有輪、縁どり、無輪の3タイプの中で、模様や図形は比較的安定している。

### (2) 特殊タイプ

本報告では、特殊タイプとして、図2に示すような、有輪・縁どり2重打（UC―④）、接圓・溝付三（UC―⑤）、バリ付圓（UC―⑥）、火焔止（UC―⑦）、弧線（UC―⑧）の5種について検討及び解説を行う。

#### a 有輪・縁どり2重打

有輪・縁どり2重打は、角度のずれた有輪の日章の上に縁どりの日章が打たれているものである。一見、

縁どりの日章が2重に打たれているように見えるが、そうではない。有輪と縁どりの2重打と判断する理由としては、日章の直径、日章の縁の形状、日章の縁外側の溝の3つの観点で考えられる。以下、順に説明して行きたい（図4、5）。

まず、日章の直径であるが、旧5円金貨明治3年の有輪と縁どりの2種をお持ちの方なら、感覚的に、有輪の直径の方が縁どりの直径よりもわずかに大きいように見えないだろうか？ もし、実際に両者の日章の直径に差があるとすれば、しかも、有輪・縁どり2重打の日章の有輪部と縁どり部と同様な差があるとすれば、有輪と縁どりの日章が2重に打たれている有力な根拠となると思われる。結論から言うと、本報告で用いた方法（「4 計測方法について」参照）で計測してみた結果、有輪の日章径は約4・1mm、縁どりの日章径は約3・9mmであり、有輪・縁どり2重打の下側に打たれた有輪部の日章径は約4・1mm、上から打たれた縁どり部の日章径は約3・9mmという結果が得られた。まさに、下側にある日章は有輪で、上から打たれた日章は縁どりであることを示している。

日章内の縦線が彫られた構造になっている。一方、縁どりの日章は、縁が盛り上がったおらず、縁と日章内の縦線の高さが同一の構造になっている。有輪・縁どり2重打については、日章の下の方に見える有輪部の日章の縁は、盛り上がった構造になっ